なまずとひきがえる　　ベトナム

昔むかし。

ひきがえるが、池の中にたまごをたくさん産みました。やがてたまごは、おたまじゃくしになりました。おたまじゃくしはみなしっぽがあって、水の中をさかなのように泳ぎまわっていました。

ある日のことです。なまずが散歩に出かけました。なまずは、おたまじゃくしが泳いでいるを見て、

「お、おれの子どもたちがいる」といいました。ひきがえるは、あわてて、

「これはわたしの子どもたちだよ」といいました。けれども、なまずは自分の子どもだといってききません。とうとうなぐりあいのけんかかになってしまいました。ひきがえるがいいました。

「おまえなんか、わたしに勝てるもんか。わたしが歯ぎしりしたら、天は四方八方ふるえあがるんだよ。わたしが舌打ちしたら、あっというまに三千匹のアリが死ぬんだよ。よおく考えな」

なまずはいいました。

「ふん。おれがしっぽをふったら、大きな波が三つも押しよせてくるんだぞ。おれがひれをふったら、たくさんのかにがおだぶつになるんだぞ。おまえこそ気をつけな」

けんかはいつまでたっても終わりません。しまいに、ふたりは裁判官のところに行って決めてもらうことにしました。裁判官はいいました。

「その子たちがだれのものなのか、今のところはまだ決められないなあ。三月になって、子どもたちがもう少し大きくなったら、また来なさい。そのときに改めて調べて、判決をいいわたそう」

三月になると、裁判官は役人を池に行かせました。そして、子どもたちがどんなようすをしているか調べさせました。それから、なまずとひきがえるを呼びだしました。

役人が、いいました。

「おたまじゃくしにはもうしっぽがありません。もう水の中には暮らしていなくて、岸辺をうれしそうにとびまわっております。これはまちがいなくひきがえるの子どもでございます」

裁判官は、テーブルをドンとたたいていいました。

「これ、なまず。おまえは、わしをだましたな。そればかりでなく、他人の子どもを自分の子どもだといって奪おうとしたな。おまえは死刑だ」

なまずはおどろいていいました。

「あなたをだますなんて。子どもたちは、あのとき、さかなみたいにしっぽがあったんです。それで、まちがえてしまったんです。ひきがえるから子どもを奪おうなんて考えてもいませんでした。どうかおゆるしください」

裁判官はいいました。

「おまえの罪は大きいぞ。だが、正直に話したので死刑はゆるしてやろう。そのかわり、二度とこんなことをしないように、おまえの頭をむちでたたくことにしよう」といいました。

なまずは、頭をむちでたたかれました。そのときから、なまずの頭は平たくなったということです。

資料　『世界の民話22インドネシア他』小澤俊夫編訳／ぎょうせい

村上郁　再話